

東京福祉会だより

第85号 (通刊108号) 令和元年6月発行

郷音

ひびき

“響”とは「郷」の「音」と書きます。私ども東京福祉会では、この温かなものを大切に「心に響く葬儀」を目指しております。



浜離宮恩賜庭園

今号の
エッセイ

「歌もうたえば山にも登る ～病と挑戦の日々～ 〈後編〉」

アナウンサー 国井 雅比古氏

令和元年度6月～9月 行事予定/わの会/東京福祉会のあゆみ(1)/東京福祉会からのお知らせ

おかげさまで創立100周年



社会福祉法人 **東京福祉会**

歌もうたえば山にも登る

病と挑戦の日々 後編

アナウンサー 国井雅比古

思いもしなかった癌宣告

今から三年前の五月十五日、女優の風吹ジュンさんと司会をつとめていたEテレ「団塊スタイル」の打ち合わせの席で前日からモヤモヤしていたお腹が堪えられないほど痛みだした。救急で病院に行き検査をうけると腸閉塞の診断。さらに検査を続けると、胃のなかに出血している。ごしごしの異物が発見された。医師たちの態度を見ていると、腸閉塞より、異物のほうに強い関心が払われているようだった。いやな予感がした。やがて医師から説明をしたので家族も来るようにという。やはりそうだったか、ああこれはドラマで見るような典型的な展開だ。でもまさか。自分があの病気にかかるとは！何かの間違いじゃないか。いや、私のすぐ上の兄は胃がんで亡くなっている。発見されたときはすでに末期で、一か月後に逝ってしまった。父とおなじ心筋梗塞でと思いこんでいたのに、兄と同じ道をたどることになるのか？

医師の表情からわかった。ただ覚悟はしていたものの、心のなかでそれを受け入れようとしないうちに。急に訪れた事態が深刻である場合、人はその深刻さを理解できないのだから。なにか他人事のようなのだ。一緒に医師から説明を受けた妻と次女の表情は緊張し青ざめている。当事者の自分より深刻な面持ちだ。後で聞くと、妻は医師の言葉がほとんど耳に入らず、頭の中は真っ白だったという。この時も心臓の時と同じく葬式をどうするかを第一に思ったという。そう簡単に人を棺桶に入れるなど言いたいのが、癌イコール死と連想した妻の気持ちも解らなくはない。そして亡くなった兄の闘病生活での苦しみ、嫁入りまえのふたりの娘の将来など、頭の中が整理されないまま帰宅したという。

どうしてこんな判断できず退院

病院側からは、このまま手術、放射線治療などを行うか、癌の専門病院に転院したり、セカンドオピニオンを求めたりするか、選択をせまられた。どうしたらいいのか？この場合、いい選択とは？自分の命にかかわることなのに、判断できない。いずれを選択するにしても具体的に何がどうなるのか想像できない。経験がないのだから、比較しようがない。いずれにせよ、手術は可能なら早い方が良く、一か月後を目途におこなう事にして、退院することにした。仕事は待っていた。

鳥越さんにインタビュー

胃がんを宣告されたことを伝えたのは担当番組のCPやデスクなどごく一部の人間たちだった。退院翌日から仕事だった。松山局制作の「小さな旅」の語りを収録、しゃっくりがとまらず困った。二日おいて「団塊スタイル」のスタジオ収録。ジャーナリスト鳥越俊太郎さんの人生を振り返るインタビューだ。鳥越さんはかつて自分がアンカーを務めていた民放の報道番組で直腸がんであることを告白したことで話題をよんだ。当時、自らが癌であることを公にすることは先例があまりなく、タブー視されていた。当時の事を語りながら鳥越さんは「今ではね、二人に一人が癌にかかる時代でしょ、だから、国井さん、風吹さ

胃の三分の二をきり取る摘出手術

癌宣告からちょうど一か月後の六月十五日。知人から紹介された専門医、兵庫医科大学の笹子三津留医師(当時)によって胃の三分の二を切除する手術をうけた。癌の外科手術専門というからさぞや強面だろうと予想したのだが、じつに穏やかで



やさしいかただ。手術をうけて五年後の生存率は六十パーセントだという。自分はその六十パーセントに入るのか？いやのこりの四十パーセントか？と率直にきくとニコリと笑い「それは神が判断することです。」サラリと答えられた。この医師ならすべてを任せられると確信した。

手術をうけ、麻酔から覚めるまでの間、夢をみた。森の中のようなところで、ブルドーザーのような機械ののって懸命に作業をしているのだが、一向にはかどらない。テレビゲームのように画面に向き合いボタンを操作する。汗をびっしょりとかく。身体全体が熱を帯びている。どっと疲れているのだが、興奮しているのが解る。目が覚めても、自分が何処にいるのかはつきりとはわからない。病室の白い天井が揺れている。目をつむると、褐色の金属の塊のようなものがドドドに溶けて、そこに様々な人間の顔らしきものが次々と現れた。怒っているもの、怖いもの、変形した不気味なものが多い。まるで五百羅漢像を見るようだ。どうしてこんな映像を見るのか、身体が動かない。これが金縛りということかと思っただ。

リハビリで出会った天使

手術の翌日からリハビリがはじまった。痛くてもなるべく歩くようにと指示された。点滴の容器をぶら下げた器具を押し

ながら歩くのだが、元気な時のように背中をまっすぐにできない。ついにお腹をかばうように背中が丸くなる。トイレまでわずかな距離なのに、数倍も時間がかかる。排便があるといいのだが力んでもなかなかできない。30分近くふんばってもダメな時は「自分の身体はもうポンコツなのだ」と半べそをかく。夜は喉にからまる痰に悩まされた。今までは、咳払い一つで簡単に除けたものが、腹部がいたくて咳払いができないのだ。夜勤の看護師の手を煩わせるのは気が引けたが、痰が気道をふさぐ苦しさで恐ろしさを初めて知った。しかたなく頼む。喉の奥に暖かい蒸気を十分ほどあてて、ようやく痰が取れた。これでゆっくり寝られると思った矢先、また痰がからむ。ぞっとする。看護師を呼ぶボタンを再び押しているものかしばらく悩む。電動ベッドを起してボタンを押す。「すみません！何度も。」いいんですよ。遠慮などしないで。仕事ですから」と笑顔で答える。汗をかいただけ、汗をぬぐい下着まで変えてくれた。多くの入院患者を抱えた徹夜勤務の多忙さと思うと、ありふれた表現だが、まさに天使だ。

一週間余りの入院生活の中でつくづく感じたのは日常生活では当たり前になしていることができないもどかしさ、逆に言えば当たり前でできることの尊さだ。寝る、起きる、呼吸する、食べる、排便する、歩く。人間はなんと大変なことを無意識

のうちにしていることか！また、あれだけ辛い思いをした登山だが、自分はその山々の頂きで再び風に吹かれることがあるだろうか？どの山でもいい、一度でいい、そこに立ちたいと願った。

あの入院からこの一月で、三年半がたつ。辛い、癌の転移や再発はない。癌ではなく心筋梗塞であの世に行きたいという「期待」は間違いだと今では思っている。癌にかかったおかげで妻や子供たちと以前より話しをする機会が増え、お互いにそれを大事にするようになった。長女は二年まえに結婚した。晩婚だったが、相手に一目ぼれしたという。父の病気が関係したか？とそっと聞いてみると、「まあーちよっとね」だった。おおきく成長したのは次女だ。担当医との細かなやり取り、病院側との交渉など一手にひきうけてくれた。家族内で一番の甘えん坊だと思っていたら、一番厳しい意見で私をたしなめる存在になった。「自分の人生だから、何をしようとお父さんの勝手、でもあとで悔やむのは自分よ」心筋梗塞で突然亡くなった父は子供や孫達にもっと伝えられたことがあるかもしれない。それを思うと自分は恵まれていると思う。

命の限りに挑戦を

去年、数え70歳の古希だったが、忙しい一年だった。二月初めには南青山のシャン

ソニエで師匠のAさんとリサイタルを開いた。下手くそながら10曲を歌った。九月には内幸町ホールで井上ひさし作「父と暮らせば」の朗読劇に挑戦。そして十月の末、全く予想もしていなかった十日間に及ぶヒマラヤトレッキングにかけた。一日11時間歩き続けた日もあった。これ以上は青くなるまいとおもえる紺碧の空。台形の巨大な山容を誇るマナスルの真白な頂きを見ながら、最終目標の標高4250mのボンカール湖を目指した。辛くて諦めようとした時に見えた銀色に輝く湖面は今でも忘れられない。

PROFILE

1949年(昭和24年)山梨県生まれ。
元NHKエグゼクティブアナウンサー
東京大学文学部卒 都留文科大学特任教授
NPO法人日本トレッキング協会会長

1973年(昭和48年)NHK入局。富山・旭川・東京・名古屋の勤務を経て、平成10年より東京アナウンス室に所属、NHKのエグゼクティブアナウンサーを経て、現在はフリーのアナウンサーとして活躍。これまでの主な担当番組は、「ぐるっと海道3万キロ」「日曜美術館」「食卓の王様」「プロジェクトX〜挑戦者たち〜」「小さな旅」「おーい日本」など数々の人気番組を担当し、現在団塊世代の充実したセカンドライフを提案する「団塊スタイル」(NHKEテレ)に出演。趣味、好きなことは溪流釣りや酒。

令和元年度

6月～9月

行事予定

展示相談会

(孟蘭盆会・彼岸法要同時開催)

孟蘭盆会、秋季彼岸会の法要日に合わせ展示相談会を開催いたします。

実際に使用する祭壇をはじめ、会葬御礼品やお香典返し、お仏壇などの展示や、葬儀に関する終活セミナーを行います。個別の事前相談も行いますので、是非この機会にお立寄りください。

■孟蘭盆会・展示相談会

開催時間	セミナー開催時間
7月14日(日) ～15日(月) 9:00～15:00	①12:00～12:30 ②15:00～15:30 (期間中毎日、1日2回)

■秋季彼岸会・展示相談会

開催時間	セミナー開催時間
9月21日(土) ～23日(月) 9:00～15:00	①12:00～12:30 ②15:00～15:30 (期間中毎日、1日2回)

施設見学会

皆さまの葬儀に対するご不安、ご不明点を解消するために当会直営式場にて施設見学会を実施しております。

実際に使用する祭壇の展示や、葬儀に関するミニセミナーを通じ、近年の葬儀事情や、葬儀費用、終活についてご案内しております。

また、個別相談も承っております。葬儀についてのご相談やお見積り等、ご質問や気になっていることがあれば、是非この機会にご相談ください。

■施設見学会

開催日時	6月24日(月) 10:00～12:00
開催場所	道灌山会館

※以降の日程については、ホームページ又はお電話にてご案内しております。

くらしの学習講座

(会友Bプランご加入の皆様限定)

今年のくらしの学習講座では、「写経教室」と「写仏教室」の2種類の講座を開催します。

写仏は、仏様のお姿、形に願いを込め丁寧に写すことで、その功德を頂きます。写経・写仏を通じて自身のありのままの心を見つめ、安らぎのひと時を感じる事ができます。

■お持ちいただくもの

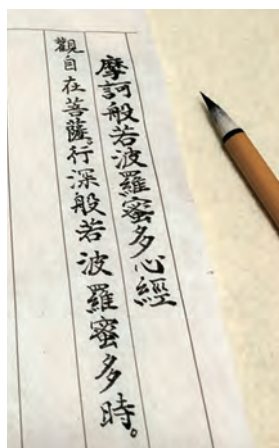
《写経教室》

小筆、硯、墨、下敷、文鎮

《写仏教室》

小筆、硯、墨、下敷、文鎮

※筆ペン(細め)でもご参加いただけます。



くらしの学習講座「写経教室」「写仏教室」

■時間／10:00～12:00

■費用／無料

■定員／各日先着30名

開催日	講座名	開催場所
6月18日(火)	写仏	ホール多摩国立
8月8日(木)	写経	道灌山会館
9月5日(木)	写仏	



※画像はイメージです。

東京福祉会のグリーフケア「わ」の会

●「わ」の会とは

東京福祉会のグリーフケア「わ」の会」は、葬儀を終えられた方々が経験される、『大切な方との死別によって生じる強い悲しみや悲嘆（グリーフ）』を少しでも癒していただきたいとの想いで、平成19年にスタートしました。

「わ」の会は次の3つの「わ」の総称として名付けて、その想いを込めて活動しております。

【和】悲しみや怒りなど様々な感情を癒し、少しでも和んでいただきたい…

【話】誰にも話せない気持ちを話すことで、想いを共感しながら癒していただきたい…

【輪】悲しみや怒りなど様々な体験談を当機関紙にお寄せいただき、「わ」の会」に参加出来ない方への想いを繋いでいきたい…

●「わ」の会の活動内容

悲嘆が癒され、無事この「わ」の会が不要なものになることを、当会では「卒業」と呼んでおります。今までに約1000名を超える方々が参加され、多くの皆様が「卒業」されました。

【参加方法】

当会にて葬儀を終えられたご遺族に案内状を送付し、事前予約をお願いしております。

【活動内容】

第一部

①和（なごみ）の時Ⅰ

〈参加条件〉

葬儀を終えて1年以内の方

〈内容〉

専門家による講演

②和（なごみ）の時Ⅱ

〈参加条件〉

どなた様でも参加できます。

〈内容〉

専門家による講演と座談会

第二部

③話（はなし）の時

〈参加条件〉

和の時ⅠまたはⅡに一度でもご参加いただいた方

〈内容〉

小グループに分かれての座談会

〈参加時のルール〉

(1) その場で話された内容は外に持ち出さない。

(2) 内容を記録（録音やメモ等）に残さない。

(3) 他人を否定、中傷するようなことは言わない。

※ファシリテーター（話をスムーズにする専門家）がグループにつき1名参加します。

●開催スケジュール

開催区分	開催日時	時 間	お申込み締切
③話の時	6月24日(月)	11:00~13:00	6月14日(金)
①和の時Ⅰ	8月14日(水)	11:00~14:00	8月4日(日)
②和の時Ⅱ	8月26日(月)	11:00~13:00	8月16日(金)
③話の時	9月17日(火)	11:00~13:00	9月7日(土)

※会場は江古田斎場です。

各行事に関するお問い合わせ・お申込みは、巻末の渉外部連絡先までお電話ください。

大正8年創業

大正12年 関東大震災

大正15年 納骨塔竣工

大正15年竣工 初代納骨塔(左)と
依頼増を受け建設された大納骨塔(右)昭和20年
昭和21年 終戦東京大空襲から一年後、ようやく
調達できた応急霊柩車(オート三
輪車)。それまでは、自転車リヤカー
を使用して搬送業務を行っていた。

東京福祉社会は法人設立から100年、助葬事業を始めとして、トータルケアサービスで高齢期の生活を支える独自の社会福祉法人として、その役割を果たしてまいりました。ご支援いただいている皆様への感謝と共に、100年の歩みと未来に向けた想いを2回にわたりご紹介いたします。

助葬会の創設

大正8年11月6日、「助葬」によつて人々に救済の手を差し伸べ、公正を図ることを最大の目的として、当会は『財団法人助葬会』として設立されました。

創設者渡邊竹次郎が記した設立理由書には、第一次大戦後、貧富の差が大きくなる中で、貧困のまま亡くなり人生最後の礼(葬儀)を営むことができない人々の救済事業を行いたい、との思いが記されています。

「現代文化の向上に比例し、社会構造は複雑になり、貧富の格差はますます大きくなった。その結果、長い闘病生活により家財を使い果たしてしまったり、

貧困のまま死亡してしまつたため、人生最後の礼(葬儀)を営むことも

できない人たちがいる。

これには、社会の無常を感じる。そんな人々を救済する機関がないことは、社会救済事業の大きな欠陥だと言える。

私は自ら公益法人を起こし、その救済事業を行うことで、社会向上に寄与したい」

二度にわたる受難

助葬会には、天災と人災、二度の受難時代がありました。

一度目は、創立から3年経つた大正12年、軌道に乗りかかった矢先に起きた『関東大震災』。そして二度目は昭和20年、震災から立ち直り、発展の兆しが見え始めたころ、第二次世界大戦終結直前に起きた『東京大空襲』です。

いずれも、建物をはじめ物的財産の殆どを喪失するという被害を

受け、そこで団体が失われてもおかしくない状況に陥りました。

しかし、職員たちの「このような時こそ、真価を発揮しなければ」という強い想いによって、助葬会は一日も事業を休止することなく継続し、今日まで続いています。

関東大震災後最初の仕事は、翌日の午後、亡くなった幼児のための棺を求めてきた女性に、焼け残った板を使って組み立て式の棺を作り、途中まで送り届けたことであつた、と当時の職員の言葉が残されています。

納骨堂の完成

大正10年に宮内省より「納骨の地を得る能わざる者(納骨場所を得られない人)のために」とご下賜のあつた土地に、大正15年に納骨塔(現納骨堂)が完成しました。

昭和26年



昭和26年には、「被災した社会福祉事業施設の慰労のため」と高松宮同妃殿下にご視察頂いた。

昭和27年 社会福祉法人へ



現在の聖恩山霊園納骨堂(江古田斎場内)

〈続〉

戦後の新たな進展

最初の1年では約150柱の受け入れでしたが、納骨堂のことが広まるにつれ受け入れ数は急増し、3年後には年間300柱、5年後には430柱と倍以上の数となり、昭和4年には大納骨堂が新たに竣工しました。この数字の遷移からは、ご葬儀だけでなく、納骨先に困っている人がいかに多かつたのかがうかがい知れます。

団体創設から、「助葬事業」のみを行ってきた当会は、昭和24年に非現業共済組合連合会(のちの国家公務員共済組合連合会)と契約し、国家公務員のご葬儀を取り扱うことになりました。ここから始まった公益事業においても、助葬事業と同様、誠意と真心をもって務め続けています。そして昭和26年に制定された社会福祉事業法(現 社会福祉法)によって、助葬事業が第一種社会福祉事業に指定されたため、当会は昭和27年に財団法人から社会福祉法人へと組織を変更いたしました。

〈続〉

東京福祉会からの新しいご提案

近親葬



葬儀は大切な人を送る、一度きりの儀式です。

当会設立当時は、その葬儀を何とか行いたいと望む方々ばかりでしたが、社会の変化と共に人付き合いの範囲や宗教観も移り変わり、葬儀は必要ない、という意見も聞こえるようになってきました。しかし、当会は設立当初から、故人様の尊厳を守る、人生最後の大切な礼(葬儀)と考えています。

最近では「家族・親族だけで

送りたい」というご希望も増えていますが、ご家族以外の方々の心にも、故人様への感謝の心や別れを惜しむ気持ちはあるのではないのでしょうか？

当会は、人数や規模ではなく、故人様がこれまで紡いできた『絆』を大切にすることが葬儀の本質の一つであると考え、家族だけの家族葬から、親しくお付き合いのあった方々も共にお見送りする葬儀を「近親葬」と名付け、お勧めしています。

実際に近親葬を行った方からは、当初家族だけと思っていたが、参列者から家族が知らなかった故人の思い出話を聞いて良かった、というご感想を頂いております。

人を呼ぶと、気苦労や金銭的な負担が増えるのではないかと? というようなご心配もあるかと思いますが、そのようなこととはございません。

家族や親しい方々が一緒にお見送りすることで、故人様の一生を振り返り、また生きる力をいただくことができる「近親葬」を、是非ご検討ください。

東京福祉会からのお知らせ

100周年記念会友加入キャンペーン

3月まで行われたプレゼントキャンペーンが大変好評のため、第2弾が決定しました！
会友Bプラン通常加入金が10,000円のところ、5,000円にてご加入いただけます。

《キャンペーン期間》

平成31年4月1日～令和2年3月31日

《キャンペーン内容》

通常加入金10,000円→5,000円
(Aプランから切り替えの場合は4,000円)

東京福祉会の「会友Bプラン」は、ご加入者と3親等以内のご家族に適用されます。

また、月々の掛金・年会費は一切不要です。

特典として、

- 基本葬祭料30%割引
 - 直営斎場利用料金50%割引
 - 生花(祭壇脇)10%割引
 - 相続税専門税理士や遺品整理業者のご紹介
 - 「くらしの学習講座」へのご招待 など
- 皆様にもしもの時の安心と、葬儀後もとても役立つ制度です。

是非、この機会にご検討ください。

人形・ぬいぐるみ供養のご報告

平成31年3月2日(土) 江古田斎場にて、人形・ぬいぐるみ供養を執り行いました。

51名の方よりお預かりした人形・ぬいぐるみを祭壇にお飾りし、堀内是長導師のもと、ご供養させていただきました。

当日は多くの方々にご参列いただき、人形やぬいぐるみへの想いが感じられ、その供養のお手伝いが出来たことを大変嬉しく思います。東京福祉会では、今年度も人形・ぬいぐるみ供養を執り行います。

具体的な日程やお預かり方法につきましては、決定次第皆様へお知らせいたします。



資料請求

ご葬儀に関する詳しい資料(料金、式場等)をご用意しています。下記連絡先までお気軽にご請求ください。

- ①葬祭料金のご案内
- ②道灌山会館限定プランのご案内
- ③ホール多摩国立限定
シルクフラワー祭壇のご案内
- ④ご火葬のみプランのご案内
- ⑤道灌山会館のご案内
- ⑥江古田斎場のご案内
- ⑦ホール多摩国立のご案内
- ⑧聖恩山霊園のご案内
- ⑨会友制度Bプランのご案内



お問い合わせ・お申し込み

〈電話〉 ☎0120-00-5677 東京福祉会 渉外部

〈E-mail〉 info@fukushikai.com

〈URL〉 <http://www.fukushikai.com>

東京福祉会

検索



「東京福祉会だより(響)」は環境に優しいベジタブルインキで印刷しています。